青森ねぶた祭り

Aomori nebuta festival

1K04B044-5 小山内 将弥

指導教員 主査 寒川恒夫先生 副査 奥野景介先生

<序章>

青森県には、日本を代表する夏祭り「ねぶた祭り」がある。私は、青森県の青森市に産まれ、高校入学までの 15 年間青森で暮らしてきた。小さい頃から毎年ねぶた祭りに足を運んでいたのだが、その迫力、熱気、そして美しさは、今でもはっきりと覚えている。私は、ねぶた祭りについて様々なことを調べ、より理解を深めていきたいという気持ちが今回の卒業論文のテーマに青森ねぶた祭りを選んだきっかけである。

この論文では、青森ねぶた祭りの起源・歴史から、 現代の青森ねぶた祭りまで、幅広い視点からアプローチをしていき青森ねぶた祭りについて考えていき たい。また、青森市外のねぶた・ねぷた祭りについて も調べていき、青森ねぶたと青森市外で行われているねぶた・ねぷた祭りの関連性も考えていきたい。

<第一章>

ねぶた祭りの起源、歴史について考え、ねぶた祭りがどのような祭りなのか述べている。ねぶた祭りは、特定の寺社の祭礼ではないため、寺社が管理する「ねぶた起源伝承」というものがなく、ねぶた起源伝承はいずれも民間伝承である。そのため、ねぶた祭りの起源説は、『眠り流し説』『津軽為信説』『田村麻呂説』の三つの有力な説に分かれており、どの説も不確かな部分があり、ねぶた祭りがいつ始まったのかということは、現在も明らかになっていない。ねぶた祭りは、記録上では今から約270~290年前、享保年間の頃から始まり、戦後の混乱期から高度経済成長期を、青森の人たちと共に歩み成長し発展してきた祭りなのである。

<第二章>

青森県には、青森ねぶた、弘前ねぷたの他にも様々なねぶたが存在する。それらは青森ねぶた・弘前ねぶたとは何が違い、何が共通しているのか、そしてどのように行われているのか、そのことを県内で行われているねぶた・ねぷたを紹介しながら述べている

青森だけではなく、弘前や黒石、五所川原、大湊など、青森県内で行われているねぶた・ねぷたは、運行時期や運行の仕方は一緒だが、その姿や形など、地域によって特徴は異なり、様々なものがある。ねぶた・ねぷたの特徴は、その土地やその土地に住む人の気質によく似ており、ねぶた・ねぷたはその土地の象徴ともいえるものである。

<第三章>

青森ねぶた祭りには、ねぶたと言われる大型の山 車があり、その山車を引き、町を練り歩く。そのねぶた の製作はどのようなものを使い製作されているのか、 またその山車を使いどのように運行されているのか、 ねぶたを作るねぶた師にも注目しながら、ねぶたの 製作・運行を順に紹介していき述べている。

ねぶた作りは題材と下絵の選定、細部の下ごしらえ、小屋がけ、骨組み、電気の配線、紙貼り、書き割り、ロウ書き、色付け、台上げ、の10の工程を経てようやくねぶた祭りに出すことができる。この一年近くかかるねぶた祭り運行へ向けての準備の中で、ねぶた作りの10の工程全てに関わっているのがねぶた師である。ねぶた祭りの運行は、前夜祭を含んだ7日間で行われ、青森の人たちが冬にためこんだ、一年分のエネルギーを乱舞と歓喜とどよめきの中で、一度に爆発させる。最後は海上運航と花火大会で締めくくり、ねぶたの終わりが秋の知らせを運んでくるのである。

<第四章>

祭りというものはその昔、人目に触れないところで密かに、神を祀る儀式として行われていたが、現在は、その目的や開催時期など、行事の内容が多種多様なものとなっている。また、時代の変化や社会・環境等の変化によって、祭りの内容も変更しており、それはねぶた祭りも同じであり現在に至るのである。その現在のねぶた祭りについて、観光化、経費の高額化、国際化の三つの視点から、現代のねぶた祭りはどうなっているのか、ということを述べている。

青森ねぶた祭りは、観光客の増加とともに、日程・ 運行内容の変更、観光施設の建設など、青森に住む 人たちだけではなく、観光に来た人たちにも楽しむこ とのできる祭りへと変化していき、現在では約 200 億 円もの巨額な経済効果を青森市にもたらし、青森の 経済を支えているのである。また、その知名度と人気 は、世界各地でも知られ、日本だけではなく世界の 人々にも楽しんでもらえる祭りへと発展しているので ある。

<結章>

ねぶた祭りは、古くから青森と密接な関係があり、 青森の文化、生活の一部として発展してきた。また、 江戸時代から現在まで300年近い年月をかけ、日本 を代表する大規模な祭りへと成長した。そのために、 様々な観光事業に取り組み、国内・国外の各地へ遠 征し、その知名度と人気をあげるなど、ねぶた祭りは 新しいことを柔軟に取り入れ成長してきた。

私はこの論文を書いたことにより、以前よりもねぶた祭りが好きになり、地元の祭りとして誇りに思うようになった。